

Lexical Ambiguity について

— 英語曖昧表現の諸相 I —

中野 清治

(平成3年9月26日受理)

要 旨

英語の曖昧表現は言語事実について興味深い側面を明らかにしてくれるが、従来の文法書は曖昧表現についてはほんの申し訳程度にしか触れていない。それで小論でこれをやや組織的に検討してみたいと思う。

言葉の曖昧性は、語そのものが多義であることに起因するものと、語が結合することによって構造が多様に働くために多義が生じるものがある。両者を併せて論ずることは紙幅が許さないで、本稿では語類(品詞)によってどのような曖昧性を生じるか、すなわち Lexical Ambiguity の姿を観察する。

キーワード

曖昧(性)、多義(性)、漠然、品詞、文脈、意味、構造、ことば遊び

1 はじめに

ある会合で日本人と英語話者との間で次のようなやりとりがあった。

A: How do you like Japanese beer?

B: In my stomach.

BはAのHowを様態の意味に(曲)解して答えているが、これを程度の意味にとって“I like it very much.”と答えることもできたはずであるから、Aの‘How’は曖昧(ambiguous)であるといえる。

言語の曖昧性は大別して Lexical Ambiguity と Structural Ambiguity に分類できるが、本稿で扱うのは上記に紹介したような Lexical Ambiguity であり、しかも文脈を捨象した英語表現の多義性を問題にしている。これは以下に見るとおり、不定冠詞 a/an をはじめ、すべての語類に生じる現象である。

Lexical Ambiguity は、文中における語の文法機能に基づく Ambiguity ではなく、語そのものが持つ「意味の多重性」が問題なので、焦点は単語に置かれる。単語の分類は従来どおり品詞別に分けてある。

用例は厳密に Lexical Ambiguity に絞るべきかとも思われたが、たとえば副詞の場合、意味もさることながら、それがどの語句を修飾するかによって統語上の曖昧さを引き起こすし、接続詞のばあい、語義は一つであってもどの語句と結合しているのか、言い換えれば、文のどこに区切りを入れるかによって曖昧性が生じてくる。それゆえ、例文の中には Structural Ambiguity の中に入れるべきものが若干入りこんでくるのはやむを得ないことで、その点はあらかじめ諒解を得ておきたい。

2 不定冠詞

不定冠詞はNPの特定性に関してambiguousである。

(1) I needed a book

- { (a) but I didn't have one.
- { (b) but I didn't have it.

(2) I was looking for some [sm] books

- { (a) but I didn't find any.
- { (b) but I didn't find them.

目的語の位置にある名詞に冠せられた不定冠詞は, specific にも nonspecific にも用いることができる。すなわち ambiguous である。この ambiguity は後続の文が解消する。上記 (1)(2) の例においては, いずれも(a) が nonspecific, (b) が specific に用いられている。(a)の場合, 書物ならどんなものでもよいが, (b)の場合, 話者の心の中には聞き手には分からないある特定の書物が思い描かれているはずである。

(3) Excuse me, I'm looking for a doctor.

(a) I'm looking for a doctor. Could you please help me to find one?

(b) I'm looking for a doctor. By the way, his name is Dr. Fox. Could you please help me to find him?

(b) は話者にとって特定の (specific) 医師であり, (a)ではどの医師でもよい。(b)で“the doctor” としないのは, 聞き手との間で未だその医師に関する shared knowledge が確立していないので, 定冠詞 the の原義「相手の Frame of Reference を尊重せよ」の原理が働いて不定表現 (a doctor) を用いたのである。

(4) John will bring a girl to the party.

村木・斎藤 (163) によれば, (4) の文において, will は <未来性> を表す法演算子 (modal operator) をもち, NP の girl がその作用域内にあるので, a girl は特定の意味にも, 不特定の意味にも解釈される。つ

まり, NP(a girl) の特定性は曖昧である。

3 定冠詞

定冠詞が単数のNPに冠せられると特定性と総称性の二つの解釈が可能になる。

(5) The horse works quite hard.

(a) その馬はまあよく働く。[特定の馬の属性]

(b) 馬はよく働くものだ。[総称的]

Cf. Dinosaurs ate kelp.

(a) 恐竜はケルプ (大型海藻) を食べていた。<習性> [総称的]

(b) 同上 <過去のある一時点での出来事> [存在的]

4 名詞

Lexical Ambiguity を生ずる最も多いケースは名詞であろう。例文をあげれば枚挙にいとまがない。

(6) They passed the port at midnight.

(a) They passed the seaport at midnight. (港を通過した)

(b) They passed the port wine at midnight. (赤ぶどう酒の受け渡しをした)

(7) Cinderella watched the colourful ball.

(a) 色彩豊かな球を見つめていた。

(b) 華やかな舞踏会を眺めていた。

(8) The thing that bothered Bill was crouching under the table.

(a) ビルに面倒だったのはテーブルの下に屈みこんでいることだった。

(It was crouching under the table that bothered Bill.)

(b) ビルを悩ました奴はテーブルの下にうずくまっていた。

(The creature that bothered Bill was crouching under the table.)

(9) The lawyer stopped at the bar, and turned to face the court.

(a) 弁護士は廷内の手摺の所で立ち止まり,

判事たちの方に振り向いた。

- (b) 弁護士はバーの所で立ち止まり、テニスコート（裁判所庁舎）の方へ振り向いた。

(8)の例では、英語の多くの名詞がそうであるように、thing に抽象性と具象性の意味が含まれているので、(a) (b) 二通りの解釈が生まれてくるのであろう。多義語の中のどの意味を採用するかは文脈によって決まることだが、(9)の場合、いわば ‘antecedent primed reading’ と呼べる原則によって、(a)の読みに大方傾くであろうことは否めない。このことに関連して田中(37)は次のように説明している。

『ある場面は特定の言語表現を連想させ、またある言語表現はある特定の場面を連想させる。……言葉と特定の場面／状況との結び付きが繰り返され強化されることによって、そのことばの語義の中でも単語からすぐ連想されるものとそうでないものがあるのであろう。』

この考え方からすれば、たとえば、“He makes beds every night.” から「彼はベッドを作る職人だ」という解釈を生み出すコンテキストはきわめてまれであるといわなければならない。

- (10) My aunt is a bachelor.

- (a) 叔母は学士です。
(b) 叔母は独身です。

Bachelor は (a) 学士、(b) 独身の男性等の意味があり、(10) は my aunt なる主語との一致において、選択制限上(a)の意味にしか取れないと思われるが、bachelor を比喩的に用いることにより (=spinster)、(b)の意味にもなり得る。比喩的な使い方すれば当然 “He is a married bachelor (=He is married, but he has a habit of a bachelor)” という表現も可能ということになる。

Bachelor も Polysemy の例にもれず、ことば遊びの材料に使われたり、Comic Dic-

tionary に登場したりする。

- (11) Not all men are fools; some are bachelors.

- (a) 男がみんな馬鹿というわけではない。
なかには学士様もいるよ。
(b) 男がみんな愚かというわけではない。
なかには結婚しない者もいるさ。

因に、この文を本学英語専攻学生に和訳させたところ、後者のように訳出したものが、一年生で26名中1名(4%)、二年生30名中11名(37%)であった。念のためカナダ人女性(20代)、英国人男性(60代)のインフォーマントに尋ねたところ、英語母語者はあらゆる年代でほとんど例外なく後者の意味に受け取るだろうということであった。文脈なしに与えた英文なので無理もないことと思われるが、日本人が英語を理解する点で、英米人の物の考え方、社会通念、文化背景等が、いかに重要な要件であるかを思い知らされた一文である。

< ~ing 形 > が現在分詞か動名詞かについては統語的な問題を含むので稿を改めて扱うつもりだが、次の後半の文の動名詞は純粋に語義上の問題なのでここに挙げておく。

- (12) A bald head is like heaven. There is no dying or parting there.

禿頭は天国のようだ。

- {(a) そこでは死も別れもない。
(b) 髪の毛を染めることも分けることもできない。

これは厳密には ambiguity の問題ではなく、懸言葉あるいは地口 (pun) を用いたことば遊びであって、(a)(b)の意味を同時に取り込まなければその面白みを逸することになる。

5 代名詞

5.1 人称代名詞に関わる ambiguity はその多くは照応に関するものである。以下の例においては和訳を示さないが、代名詞の照応に異なった読みができることを(a)(b)が示して

いる。

(13) John thinks that he will win.

(a) he=John./ (b) he≠John.

Cf. He thinks that John will win.

(He≠John)

(14) That John is well liked surprises him.

(a) him =John./ (b) him ≠John.

Cf. It surprises him that John is so well liked. (him≠John)

(15) When John met Tom, he took off his hat.

(a) he=John./ (b) he≠John [he=Tom].

(16) John expected [Mary to catch him].

(a) him =John./ (b) him ≠John.

(17) John expected [that Mary would catch him].

(a) him =John./ (b) him ≠John.

(16)(17)において [] で示す領域を統率範疇と呼ぶが、この範囲内での代名詞は自由に解釈できる。

(18) John told Bill he had won.

(a) he=John./ (b) he=Bill./ (c) he=この文に先行するNP.

5.2 再帰代名詞についても同様に照応関係によって複数の解釈を許す。

(19) John talked to Bill about himself.

(a) himself =John./ (b) himself =Bill.

(20) John asked Bill to send me the picture of himself.

(a) himself =John./ (b) himself =Bill.

5.3 人称代名詞に代用表現がからんでくると解釈も複雑になってくる。

(21) John loves his wife, and so does Bill.

(a) Jはあいつの妻君を好いている。Bもだ。

(b) Jは妻君を愛している。Bもそうだ。

(c) Jは妻君を愛している。BもJの妻君を愛している。

5.4 疑問詞が人称代名詞と共に起るとambiguousになることがある。(22)~(24)は痕跡を入れると、それぞれ(25)~(27)のようになる。これらの痕跡を見ることにより、(22)(23)ではwhoがsaidの主語、(24)ではwhoがkissedの目的語であることが分かる。

(22) Who said Mary kissed him?

(a) him =who./ (b) him ≠who. [文中に登場する人物は3人(以上)]

(23) Who said he kissed Mary?

(a) he=who./ (b) he≠who.

(24) Who did he say Mary kissed? (he≠who)

(25) Who_i [s t_i said Mary kissed him]? = (22)

(26) Who_i [s t_i said he kissed Mary]? = (23)

(27) Who_i [s he said Mary kissed t_i]? = (24)

(22)(23)ではhim/heはwhoと照応関係を結び得るのでambiguousであるが、(24)ではheはwhoと照応関係を結び得ないので、文中の人物は3人であることは明確であり、ambiguityを残さない文である。

5.5 ここでいわゆるambiguityとvaguenessについて少し触れておかねばならない。

(28) John saw his father in the distance.

上記の文に限らずhisは男性・単数の指示物なら何でも指示できる。すなわち、

[1] 言語文脈の中で既出の男性のNP(必ずしも同一文中のNPとは限らない)と照応関係を示す。

[2] 非言語文脈の中の指示物を指す。

(28)の場合、[2]で示した事実からすれば、hisが指示しているものは理論上無数にあるわけで、これは二義(ambiguous)とい

うよりは、指示が漠然としている (vague) というべきであろう (太田:19)。Ambiguity は意味の問題であり, vagueness は指示の問題である。

Vagueness については次に扱う形容詞についても当てはまることで, 例えば, “a good knife”, “a good pianist”, “a good time” などは意味の応用範囲がはっきりしない (= vague) だけであり, 厳密な意味での多義語ではない (田中:29)。形容詞 “good” に関しては安藤 (正, 281ff.) に優れた論考がある。

代名詞の締めくくりに one を用いた多義表現に触れておきたい。Prop-word ‘one’ は既出の名詞を受ける前方照応の用法 (Anaphoric use) と, 文脈から独立した用法 (Independent use) がある。例えば, 前者のばあい, ‘the little one’ といえば, 何であれ今しがた言及された名詞 (the little flower とか the little dog など) のことを意味しているのに対し, 後者のばあい, ‘the little one’ は文脈から独立して「子供」(the child) を意味する。独立用法の one は常に人間を表すが, 前方照応の one は物を指すと考えてよい。Jespersen (MEG II, 10.14) は, 結婚したばかりのカップルに向けた言葉として, 上記二用法を巧みに用いた表現, したがって両義に解し得る一種の語呂合わせ (Pun) を紹介している。

(29) May all your future troubles be little ones.

- (a) 将来いざこざがあれば小さなものでありますように。
 (b) 将来問題があれば子供さんのことだけでありますように。

6 形容詞

他の語類と同様に形容詞も polysemous であるから当然曖昧な文が生じる。

(30) John did not take the right turn at

the intersection.

- (a) ジョンは交差点で右に曲がらなかった。
 (right = right-hand)
 (b) ジョンは交差点で正しく曲がらなかった。
 (right = correct)

(31) Would you like another drink?

- (a) もう一杯いかがですか。
 (one more of the same)
 (b) 違った飲み物はいかがですか。
 (a different drink)

(32) I need some other clothes.

- (a) これらの外に (加えて) 何着かが必要だ。
 (I need some clothes in addition to these.)

[other = function of addition]

- (b) これらの代わりに何着かが必要だ。
 (I need some clothes instead of these.)
 [other = function of replacement]

(31)(32)の文が二つの解釈を許すことから推論できることは, another 及び other は「すでに話題になっている物や状況に考慮を払うように」との標識として働いているということである。

(33) May I have a little cake, please?

- (a) 小さなケーキを一ついただけませんか。
 (little = small [adjective])
 (b) ケーキを少しいただけませんか。
 (little = a small quantity of [determiner])

(34) A lovely red rose.

- (a) <すばらしい赤色の> ばら。
 (A rose that is of a lovely red colour. [lovely = intensifier])
 (b) 赤いすてきなばらの花
 (A rose that is both lovely and also red. [lovely = adjective])

<~ly Adj. NP>の “~ly” は(a)においては Intensifier として, (b)においては fine と同類の形容詞として用いられている。ユーモラスな表現や詩的表現ではわざと曖昧さを

醸し出すために and を用いないことがある。次の例も(34)と同様の曖昧さを含んだ文である (Blake:38)。

(35) This is a scholarly witty book.

(a) これは学者らしい機知に富んだ書物だ。

(b) これは学問的かつ機知に溢れた書物だ。

(= scholarly and witty)

形容詞 lucky, careful, clever, smart, stupid 等が副詞 'too', 'enough' と共にもちいられ、後に<to- 補文>を従える否定文は極めて込み入ってくる。

(36) John wasn't $\begin{cases} \text{too clever} \\ \text{clever enough} \end{cases}$
to leave early.

(a) ジョンが早く発ったのは賢明ではなかった。

(b) ジョンは早立ちするほどよく気がまわる男ではなかった。

(a) においては enough, too は very, so などと同じく単なる Degree Adverb として用いられ (従って省略も可), 補文 <to leave ~> は 'John left early' という前提として働いていて, 否定の作用はそこまで及ばないとする解釈である。それに対し, (b) においては, "enough...to", "too...to" を Correlative Degree Adverb と見る。すなわち, enough, too が後に来る to X と相関関係にある場合, この否定文の含意は 'John didn't leave early' であるとする解釈が働く。

<Not too A to X> は to X に含まれる否定をもう一度否定することになるので, 心理的に複雑な操作が必要であり, 上のように二つの解釈が可能な場合, 心理的に複雑でない方の解釈 (a) が優先されるようである (太田:452)。

次に名詞に先行する形容詞が二つの異なった用法を持つことから生じる曖昧さを見てみよう。

(37) My vegetarian aunt is coming to dinner tonight.

(a) 菜食主義の(方の)叔母が今夜夕食に来ることになっている。

制限的: [my Δ] [an aunt of mine is vegetarian]

(b) 叔母は菜食主義だが, 今夜夕食に来ることになっている。

記述的: [my aunt] [my aunt is vegetarian]

(38) The philosophical Greeks liked to talk.

(39) The Greeks who were philosophical liked to talk.

(38)の曖昧さは(39)と同様である。(39)の the Greeks が総称ならば 関係詞節は記述的で, [the Greeks] [the Greeks were philosophical] と解し, 一方ギリシア人の一部についてならば [the Δ] [some Greeks were philosophical] という制限的関係詞節になる。(38)については, 強勢を Greeks に置けば記述的, philosophical に置けば制限的というふうに区別し得る (中島, 上:32)。

関係詞節が出たついでに, その先行詞に the が冠せられた場合の曖昧性についてもう一つの例を挙げておこう。

(40) The policeman who knows the way has offered to guide us.

(a) 道を知っている警官が案内してあげようと言ってくれた。

制限的: [the Δ] [one policeman knows the way]

(b) 道を知っている警官は案内してあげようと言ってくれた。

記述的: [the policeman] [the policeman knows the way]

以上, 形容詞の場合, 同音異義 (right), 意味特性 (another, other), 異語類兼用 (little, lovely), 性格形容詞 (careful, clever, etc.), 形容詞の二用法 (Attributive, Predicative)等によって曖昧性が生じることを見てきた。

7 前置詞

- (41) There is a tree across the road.
 (a) 道路の向こう側に樹木が一本ある。
 (There is a tree on the other side of the road.)
 (b) 道路を横切って樹木が一本倒れている。
 (There is a tree lying across the road.)
 (a) はコミュニケーション参加者の視点がかたよりの解釈に関係してくるケースで、前置詞 across は deictic 用法である。もし観察者を木のある側に移せば across の使用は不可になる。これに対し、(b) では観察者がどこにしようと、ACROSS (a tree, the road) の関係は一定である。(a) では視線の移動が容易に考えられるのに対し、(b) では木と道路の静的な位置関係だけが問題となっている(田中: 355)。
- (42) I'll do it in an hour.
 (a) 1時間でやりましょう。([X])
 (b) 1時間後にやりましょう。([X])
 前置詞が慣用句に含まれている場合、比喩的な読みが可能となり、二義に解せられる。
- (43) He stands head and shoulders above them.
 (a) 彼らよりずばぬけて背が高い。
 (b) 彼らより断然優秀だ。
 他の語類や品詞と同じく、前置詞も曲解することによって面白さを生むジョークに登場してくる。
- (44) A: I will examine you for \$10.
 B: Go ahead. If you find it I'll give you half.
 B: (a) 10ドルで診てあげよう。
 (b) 10ドル所持していないか検査する。
 B: どうぞ。みつかったら半分あげますよ。
- (45) A: I heard you were awful sick.

Couldn't the doctor do you any good?

B: No. He told me to drink a gallon of whiskey after a hot bath.

A: And did you do it?

B: I couldn't finish drinking the hot bath.

「熱いお風呂のあと」というのが曲者で、前置詞 after の後に省略されている動名詞が二通り考えられる。医者は 'after taking a hot bath' の意味で言ったのだが、B は 'after drinking the hot bath' ととんでもない取りかたをしたのである。

8 助動詞

Perkins (25) は、すべての学者の見解が一致しているわけではないとしながらも、
 "All the modals are clearly ambiguous."
 と述べて、次のような例を挙げている。

(46) Elephants can kill crocodiles.

(a) Elephants have the ability to kill crocodiles. [Root]

(b) It can happen that an elephant kills a crocodile. [Epistemic]

概ね法助動詞 (Modals) は、Root (もしくは Deontic) と Epistemic の二つの用法があって、それが ambiguity を生じる原因となっている。我々の関心はコンテキスト情報を省いた 'context-free meaning' における曖昧性であるが、法助動詞 can は一つの意味に収斂し得るとしながらも、以下のような多義性を論じている Lewis (112) はやや的を逸している感がある。

Lewis はあるスポーツ競技の世界選手権大会に先だって、次のような見出しが新聞に載ったことを引用し、種々の意味分析をしてみせている。

(47) Overt Cannot Replace Coe.

(a) 話者はOの選手としての力がCに及ばない、と思っている。

- (b) 何かの事情, たとえば負傷のため, OはCの交代要員になれない。
- (c) Oは誰か, たとえば競技査問委員会, によってCの代わりにすることを差止められた。
- (d) CはOが自分の代わりに出場することを許そうとしない。

OとCの人物, 当時の状況, 国際大会の競技規則, その他のことに関する理解があっはじめて上記のうちのどれかはっきりした解釈ができるのだが, いずれの解釈を取るにしても, それぞれ異なった (im)possibility に依存している。Lewis は can を含むその他諸種の例文を挙げて, ability, objective possibility, requests, offers, deduction 等という具合に, 文脈上の意味が機能的に様々に現れること, しかも can の基本的意味特性はどの例にも一貫して流れていることを指摘している。とはいえ, (47a-d)は文の多義性を云々しているというよりは, 状況の多様性を分析しているに過ぎないのではなかろうか。

Can が用いられた例に共通に見られる核となる意味は 'Possibility' と関連しており, 'Possibility' にも様々な種類があることから曖昧さが生じる。

- (48) John can come.
- (a) Possibility of permission.
- (b) Physical possibility. (Jの足はよくなってまた歩ける)
- (c) Possibility of non-restriction. (その日は仕事や約束などに拘束されていない)

ふつう, 話者と聞き手との間の既知情報や文脈によって, 状況に相応した解釈を 'Possibility' に与えることができるので, 曖昧さは解消できる (Lewis:103f.)。

- (49) (a) You cannot go today.
(=You are not permitted to go today.) [助動詞否定]

- (b) You can not go today.
(=You are permitted not to go today.) [本動詞否定]

- (50) (a) You cannot eat your cake and have it.
(ケーキを食べておきながらそれをまだ手元においておくなんて, そうは問屋がおろさない)
- (b) You can not eat your cake and have it.
(ケーキを食べないで, そのままずっと手元においておくこともできる)

(49)(50)は活字で表されているので読み間違えることはないが, 話すときには, いずれも (b)の not に強勢をおかなければならない。

- (51) John could have done it.
- (a) ジョンだったらそれをできたのに。
(John would have been able to do it / The one who could have done it is John.) [Deontic]
- (b) ジョンがそれをしたはずだ。(It is possible that John did it / The one who did it could have been John.) [Epistemic]

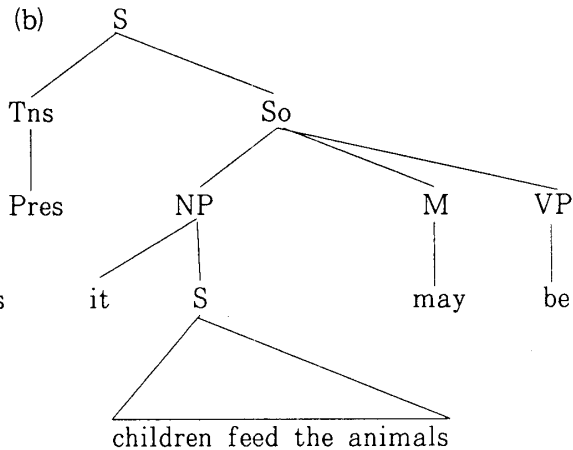
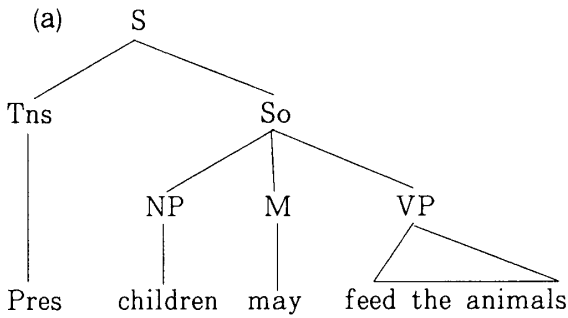
Deontic 'can' は完了形を後に従えることはできないが, Deontic 'could' は後に完了形を用いることが可能であるため, (51)のような曖昧さが生じる。

法助動詞 may の曖昧さをどのように扱うか, 以下に(52)は中島(上:154)から, (53)は太田(463)から, (54)は Perkins(100)から所説を紹介してみる。

- (52) Children may feed the animals.
- (a) 餌をやってもよい [人称的: 話者の許可]。
- (b) 餌をやるかもしれない [非人称的: 話者の判断を表すが, 判断の主語は非人称の it である] (=It may be that children will feed the animals.)。

中島は(52)の樹形図を示していないが, (a)

(b)はそれぞれ下のようになるものと思われる。



- (53) The windows may be broken.
 (a) It is possible that the windows are broken. [状態, 既成, Epistemic]
 (b) It is possible that the windows will be broken. [動作, 未来, Epistemic]
 (c) It is permitted that the windows be broken. [動作, 未来, Deontic]
 (54) He may go.

- (a) 'Possibility'
 1) Present or Future (vague)
 2) Subjectively or Objectively epistemic (vague)
 (b) 'Permission'
 3) The source of the permission:
 speaker or not speaker?(vague)

上記は(54)の ambiguity とその各意味における vagueness を箇条書きにしたものだが, Perkins (101f.) の paraphrase は以下に示す通りである。

- (54a1a) Possibly (It's possible that / There's possibility that) he goes.
 (54a1b) Possibly (It's possible that / There's possibility that) he will go.
 (54a2a) I think (I believe / I reckon) he goes.

- (54a2b) I think (I believe / I reckon) he will go.
 (54a2c) Perhaps he goes / Perhaps he will go. [subjective/objective distinction inexplicit]
 (54b3a) It is permitted (permissible) for him to go.
 (54b3b) I permit (I allow/I authorize) him to go.

- (55) You may not disturb us.
 (a) You are not permitted to disturb us. [Deontic, not に強勢]
 (b) It is possible that you do not disturb us. [Epistemic, may に強勢]
 (55a) は助動詞否定, (55b) は本動詞否定である (村木・斎藤:174)。

- (56) He must know the reason.
 (a) 彼にはその理由を知っていることが必要だ。
 (It is necessary that he should know the reason.)
 (b) 彼にその理由をどうしても知らねばならない。
 (It is necessary that we should let him know the reason.)

(c) 彼はその理由を知りたいといっ
てきかない。

(He insists on knowing the reason.)

(d) 彼はその理由を知っているにちが
いがない。

(It is certain that he knows the
reason.)

Lewis (114) が “Must [necessity] = I
assert that it is necessary that...” と par-
aphrase し得るとしながらも, must を(57)
のように 4種類に分けているのは(47)で指摘
したのとおなじ弊に陥っているように思われ
る。

Perkins (37)は ‘must’ の core meaning
として(58)のような一つの簡単な定式を与え
ている。

(57) (a) You mustn't leave the car there
after six. [Legal]

(b) You mustn't say things like that
to Mrs Wilson. [Moral]

(c) You must be careful with your
money there. [Practical]

(d) They must have got the letter
by now. [Logical]

(58) MUST: K(C entails X)

where: i. K=social laws/rational
laws (typically)

ii. C=deontic source / evi-
dence (typically)

iii. X=the occurrence of an
event/the truth of
the proposition.

Must の後に完了形が来る場合も ambi-
guityが生じる。

(59) You must have completed the work.

(a) It is certain that you have com-
pleted the work. [Epistemic]

(b) It is necessary for you to com-
plete the work (by tomorrow).
[Deontic]

(b) の場合には () 内に示したような未
来を表す時間表現が必要であり, また must
は have to で置き換えることが可能である
(太田:461)。このことに関連して完了形の命
令文にも未来を示す時間表現が必要であるこ
と(Have read this pamphlet by tomorrow.)
を想起すべきである。

(60) You will be there by seven o'clock.

(a) 7時までにはきっと着く(列車に遅
れる心配はない) [Temporal inevi-
tability を含意]

(b) 7時までには着いているように。

[Logical inevitability を含意]

(b)よりも(a)の意味で使われることが多いた
め, will は未来を表す助動詞であると従来み
なされて来た。しかし, (a)の用法の方が多
いという事実は will を「未来を表す助動詞」
と同一視してよいということにはならないだ
ろう (Lewis:116)。

(61) John won't go downtown.

(a) Jは下町へは行かないだろう。

(It is not the case that John will
go downtown.)

(b) Jは下町へ行くことを拒絶している。

(John refuses to go downtown /
John insists on not going down-
town.)

法助動詞の意味をめぐる論議は, この小論
では到底扱い切れないので, 他書に譲るこ
とにする。

9 動 詞

動詞も名詞と同様その多義性と意味特性に
よって ambiguity を生みだす。

(62) The premier ordered the army to
stop looting in the countryside.

(a) 首相は田舎での農民の掠奪を止めさ
せるよう軍に命じた。

(b) 首相は軍に田舎での掠奪を止めるよ
うに命じた。

(63) Can you spare me a few minutes?

(a) 2, 3分さいて下さいませんか。

(b) 2, 3分失礼しても [座をはずしても] いいですか。

(62)の曖昧性は動名詞 *looting* の意味上の主語が明示されていないため、また(63)は *a few minutes* をNPととるか、AdvP ととるかによって意味の相違が生じたのである。例によって動詞を使った *Jokes* も事欠かない。

(64) A: Got your teeth filled, eh? Did the dentist do a good job?

B: Well, I can honestly say he spared no pains.

A: 歯に詰めものをしてもらったの? 歯医者さんはちゃんとしてくれたかい?

B: (a)正直な話、先生は苦勞をいとわなかったよ。

(b)正直な話、先生は痛みを与えるのを容赦しなかったよ。

(65) T: You missed my class yesterday, didn't you?

S: Not in the least, sir, not in the least.

T: (a)君はきのう私の講義に出なかったね。

(b)君はきのう私の講義を聞き損なった [聞けなくて残念だった] ね。

S: とんでもありません。

(66) No time should be lost in looking into the problem.

(a) 今すぐその問題の調査にとりかかるべきである。

(b) その問題を調査して時間をむだにすべきではない。

(67) There is no love lost between them.

(a) 互いに何の愛情ももたない / 互いに憎み合っている。

(b) 互いに愛し合っている《原義》。

(66)(67)は英文・和文ともに研究社「新英和大辞典」(s.v. *lose*, vt. 4a)に記載されているものだが、(66a)はその意味からして「vt. 9a <機会を> 逃がす, 逸する」に収まるべきはずのものである。(67)はまったく相反する意味に解されるので興味深い文ではあるが、これも (a)(b) ともに「vt. 2 (維持できなくてまたは衰えて) 失う」という語義の項に入れるべきものと思われる。(67b)の訳は<二人の間では愛は失われていない>という解釈から派生したであろうことは察せられるが、(67a)の訳はどういうふうが生じたのだろうか。これはあくまで推測に過ぎないが、ことばというものはその意味も含めて時とともに変化するし、話者が意味に捻りを加えたり、勝手に前提を設けたりして、当初の意味とは異なった用い方をすることは察するに難くない。それで、(67a)は「二人の間で失われた愛(なんてもい)はない」→「二人は初めから愛し合っていなかったのだ」→「互いに何の愛情ももたない」というふうに変化したものと思われる。

10 副 詞

(68) Mary is only pretty.

(a) Mはかわいらしいという程度だ。

(Mary is no more than pretty.)

(b) Mはかわいらしいだけだ。

(Mary isn't anything else. She isn't intelligent as well.)

(68a)は同じ美醜の尺度の中で *beautiful* という所までは行かないという意味で、*only* は数量詞的である。それに対し、(68b)は *pretty* を他の種類の資質 (例えば, *intelligent*) と対比しており、*only* は 'no other than' の意味である (太田:131)。

(69) John only phoned Mary today.

(a) Jだけが今日Mに電話した。

(b) Jは今日Mに電話しただけだ (逢っ

てはいない)。

(c) Jが今日電話したのはMだけだ。

(d) JはMに電話を今日したばかりだ。

上の例は *only* の作用域と焦点が問題となる文で, *only* 以外のどの語に強勢を置くかによって, 解釈が異なってくる。Only は注意や制限など話者の気持ちを表現するために挿入的に用いられ, 文中における位置もかなり自由な副詞的付加語 (Adverbial adjunct) とみなされる (中島, 下:120)

さて, ここで本題とはやや離れるが, 日本人にとって 'あいまい' などられ方をされている *quite* と *still* について瞥見しておく (Close:359 fn., 362)。

(70) (a) Mary is quite pretty.

(Mはまあきれいだ)

(b) Mary is quite right.

(Mの言っていることはまったく正しい)

程度を表す *quite* は 'gradable adverb or adjective' の前で用いられると *moderately* の意味となり, 'ungradable adverb or adjective' の前で用いられると *absolutely* の意味となる。

(71) (a) He's not still waiting.

=He has stopped waiting.

(b) He's still not waiting.

=He has not started waiting yet.

副詞類がどの語を修飾するか (AdvP attachment) によって曖昧さが生じる。これは Structural Ambiguity の部類に入るべきものであが, それらをまず (72)-(75) で扱う。

(72) John intended leaving yesterday.

(a) 過去のある時点でJは昨日発つつもりでいた。

(b) 昨日Jは未来のある時点に発つつもりでいた。

上の英文は, *intend* を動詞とする上位の節と *leave* を動詞とする下位の節が存在す

るが, *yesterday* がどちらの節にあるかの解釈の違いによって両義となる。(a) では出発の時点が規定されているのに対し, (b) では意図の時点が規定されている。*Intend*, *want*, *expect* 等は補文に時間の副詞をとり得るが, *begin*, *keep*, *stop* はとり得ない (岡田・山梨: 355f.)。次は補文に不定詞が用いられている例である。

(73) He wanted to elope with her yesterday.

(a) He wanted [to elope with her yesterday].

(b) He wanted [to elope with her] yesterday.

(74) He told her quietly to row the boat.

(a) He told her [quietly to row the boat].

(b) He told her quietly [to row the boat].

(74)は分裂不定詞を避けて, 不定詞内の副詞を不定詞の直前に持ってきたので曖昧性が生じたのだが, 伝達動詞が出てきたついでに, 日本語での伝達文における修飾 (副詞) の曖昧性も見ておきたい。日本語は節頭境界を持たないために, こうした現象が起こるといえる (Kess & Nishimitsu: 158)。

(75) (a) 彼は人前で子供を抱くなど叱った。

[人前で→抱く, 叱った]

(b) バスの中でたばこを吸うことは悪いことだと考えた。[バスの中で→吸う, 考えた]

形の上ではVPを修飾するが, 意味の上では動詞を修飾しない副詞がある。

(76) (a) Jack kissed Jill cheerfully. [話者評言]

=Jack was cheerful when he kissed Jill.

(b) Jill was kissed by Jack cheerfully.

=Jill was cheerful when she was

kissed by Jack.

(c) Jack treated Jill cruelly. [様態]

(d) Jill was treated cruelly by Jack.

(a) の cheerfully は意味上 kissed という動詞を修飾しているのではなく、主語の Jack の動作についての話者の評言であることは、受動文 (b) で cheerful であるのは Jill であることから分かる。様態の副詞 cruelly は(c)(d)の両方とも動詞 treat を修飾している (中島, 下:87)。なお(76)において(a)を(b)に受動変形して意味が変わったということは、表層構造も意味解釈に与っている証拠である (村木・斎藤:172)。話者評言的副詞は 'Disjunct' と呼ばれているが、これが疑問文とともに用いられると興味深い現象を呈する (CGEL:8.124, 太田:480)。

(77) Frankly, is he tired?

(a) I ask you frankly, is he tired?

(b) Tell me frankly, is he tired?

疑問文の遂行的表現は "I ask you to tell me..." という意味で, frankly は ask を修飾するのかそれとも tell を修飾するのか, つまり frank なのは話者か聞き手かということで, 曖昧さが生じる。

(78) Ross ate his breakfast (,) in accordance with the law.

(a) The law obliged Ross to eat his breakfast, and he did so.

=Ross, in accordance with the law, ate his breakfast.

=In accordance with the law, Ross ate his breakfast.

(b) The particular way that Ross ate his breakfast was legal.

(78)において, comma の有るほうが(a), 無いほうが(b)の意味である。

AdvP attachment は 'lexical preference' と文中における AdvP の位置の両方で規定される。一般的に言って AdvP が文頭にくれば Sentence attachment, 文尾にくれば

VP attachment である。次の例を見られたい。

(79) (a) Fortunately, he did not die.

[Sentence attachment]

=He did not die, and that was fortunate.

(b) He did not die fortunately.

[VP attachment]

=It was not the case that he died fortunately.

=He died in an unfortunate manner.

疑問副詞も, それが(80)のように修飾する動詞の曖昧さ (Structural Ambiguity) と, 本稿冒頭の例で示したように語本来の多義によって, 曖昧な文を生み出す。

(80) When did he say he would come?

(a) 彼は, いつ来ると言いましたか。

[come に強勢]

(b) 彼はいつ, 来ると言いましたか。

[say に強勢]

(81) Where did he catch her?

(a) He caught her in the hotel.

(b) He caught her by the sleeve.

Where は 'in what place', 'by what part' というPPに書き直してみると, locality と instrument の二義を有することになるので, (81)の問いに対して, (a) (b) のような二通りの応答が可能になるわけである。この曖昧性を利用した joke も事欠かない。一例を挙げてみる。

(82) S : Professor, I can't go to class today.

P : Why?

S : I don't feel well.

P : Where don't you feel well?

S : In class.

疑問詞をめぐる多義文はまた別のところで扱う予定である。

11 接 続 詞

(83) The tall boys and girls.

(a) The tall [boys and girls].

(b) The [tall boys] and girls.

(84) John and Peter had owned the flat.

(a) JとPはそのフラットを別々に（従って異なる時期に）所有していた。

(b) JとPはそのフラットを共同で所有していた。

(85) John and Mary are married.

(a) John is married to someone and Mary is married to someone.

(b) John and Mary are married to each other.

(a) は節からの再構造化による方法 [Sの等位接続] で得られたものであり, (b) は等位接続されたNP主語を持つ単一の深層構造から派生 [NPの等位接続] したものである。And の代わりに or を用いると (a) の読みになる。すなわち, 節の等位接続によって派生された文となる (岡田・山梨:163)。安藤 (続:194) は (a) のような文接続を分離的等位, (b) のような NP 接続を連結的等位と呼んでいる。

(86) Harry knew Fred and Tom knew Liz.

(a) [Harry knew Fred] and [Tom knew Liz].

(b) Harry knew [Fred and Tom knew Liz].

(87) Claire will marry Burt and Ethel will resign if David goes to Glasgow.

(a) C will marry B and if D goes to G, E will resign.

(b) If D goes to G then not only will C marry B but E will also resign.

接続詞 and が用いられたとき, どの構成素が接続されるのかという問題を (83) (86) で見たが, それは見方を変えれば文のどこで区切るのかということと同じである。(87)は

条件を表す if と他の接続語 (connectives) が共起するとき, 曖昧さが生じることの例である。即ち, <if-節> は S_2 (= Ethel will resign) だけにかかっているのか, それとも $S_1 + S_2$ の両方にかかっているのかが曖昧なのである。いずれにしても, Claire が Burt と結婚することには変りはない。上記の例は下の例とともに, Structural Ambiguity に属するものである。

(88) Adam will take Lucy or Cathy and Diana.

(a) Adam will take [Lucy or Cathy] and [Diana].

(b) Adam will take [Lucy] or [Cathy and Diana].

(89) Shall we ask Hellen and Jane or Bill?

(a) Shall we ask [Hellen] and [Jane or Bill]?

(b) Shall we ask [Hellen and Jane] or [Bill]?

合併的並列を表す接続詞 and (「並びに, 及び」) と選択的並列を表す or (「若しくは, 或は, または」) が現れる順序にかかわらず, NP連結の区切りによって多義性が生じる例であり, 同様の現象は日本語にも生じる。

(90) AまたはB及びC。

(a) [AまたはB] 及びC。

(b) Aまたは [B及びC]。

(91) He dodged before the ball hit him.

(a) 「ボールは彼にあたった」という読み [< before-節 > 内の内容は真]。

Eg. He rested before he saw the ambassador.

(b) 「ボールは彼に当たらなかった」という読み [< before-節 > 内の内容は偽]。

Eg. He died before he saw the ambassador.

この場合, before に二義があって曖昧性が生じるということが問題なのではなく, 副

詞節の中で述べられている事柄が事実であるという含意を有するか否かが問題となるのである。それを決めるのは文脈であるということになる。

12 結 び

冒頭で述べたとおり、小論の目的は、それぞれの品詞においてどのような曖昧性が生じるのか、その実態を観察することであった。

名詞では同音異義による曖昧性が専らであるのに対し、代名詞は照応関係で曖昧さが生じることの多いことを見てきた。形容詞は多義性に加えて、制限的・記述的の二用法があること、また異なった語類を兼用することによって由来する曖昧性があることを見てきた。前置詞は時空間の関係を表す語であるが、曖昧さは話し手の視点や語義の多義性に起因することを例文は示していた。

法助動詞は小論で扱うには余りにも大きな問題であるが、意味論的に極めて興味深い材料を提供していることは、本論の数例を見ただけでも理解できる。動詞は文型によって意味を変え、Structural Ambiguity を生みだす最たる源であるが、Lexical Ambiguity をも生みだすことは本例で見たとおりである。

副詞は作用域や修飾（付加）の差異によって、そして接続詞は語句の結合のあり方によって多義が生じることを概観してきた。

語学関係の論文はとかく硬くなりがちで、特別に関心をもつ者でないかぎり、それを読んで知的な刺激や喜びを得ることは余りないようであるが、本稿は随所にジョークを例文として配してあるので、わさびのようなききめが多少はあるのではないかと密かに期待している。

引用文献・脚注

- Blake, N.F. *Traditional English Grammar and Beyond*. Macmillan, 1988.
- Close, R.A. *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*(3rd ed.). George Allen & Unwin, 1981.
- Copeland, J. & F.(ed.) *10,000 Jokes, Toast & Stories*. Doubleday & Company, Inc., 1965.
- Hirst, G. *Semantic Interpretation and the Resolution of Ambiguity*. Cambridge U.P., 1987.
- Huddleston, R. *English Grammar: an Outline*. Cambridge U.P., 1988.
- Hurford, J.R. & Heasley, B. *Semantics: a coursebook*. Cambridge U.P., 1983.
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles*(Pts. II & V). George Allen & Unwin, 1954.
- Kess, J. & Nishimitsu, Y. *Linguistic Ambiguity in Natural Language: English and Japanese*. くろしお出版, 1989.
- Lewis, M. *The English Verb: An exploration of Structure and Meaning*. Language teaching publications, 1986.
- Marquez, E.J. & Bowen J.D. *English Usage*. Newbury House Publishers, 1983.
- Meiers, M. & Knapp, J. *5600 Jokes for All Occasions*. Avenel Books, 1980.
- Perkins, M.R. *Modal Expressions in English*. Francis Pinter, 1983.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. [CGEL] Longman, 1985.
- Yule, G. *The Study of Language*. Cambridge U.P., 1985.
- 安藤 貞雄 「英語教師の文法研究」(正・続) 大修館書店, 1983, 1985.

- 石橋幸太郎編 「現代英語学辞典」 成美堂,1973.
- 梅田 巖・藤井健夫・石井丈夫・北 和明・竹村憲一 「英語学の視界」昭和堂,1984.
- 太田 朗 「否定の意味」 大修館書店,1980.
- 大塚高信・中島文雄監修 「新英語学辞典」 研究社,1982.
- 郡司利男編 「英和笑辞典」 研究社,1961.
- 田桐大澄編 「英語正用法辞典」 研究社,1970.
- 田中茂範編 「基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ」 三友社出版,1987.
- 中島 文雄 「英語の構造」(上・下) 岩波書店,1980.
- 村木正武・斎藤興雄 「意味論」(現代の英文法第 2 巻) 研究社,1978.
- 安井 稔 「意味論」 大修館書店,1983.

On Lexical Ambiguity in English

— Varieties of Ambiguity of English Expressions I —

Kiyoharu NAKANO

(Received September 26, 1991)

ABSTRACT

Inasmuch as the Japanese tend to take 'ambiguity' as identical with 'vagueness', it may be advisable to draw a strict distinction between the two terms. The latter is the case where a referential word refers to a wide range of different things or persons. We are here not concerned with this kind of referential vagueness. The former is the case where a word or a phrase or a sentence has more than one sense. Ambiguity resulting from a word is called Lexical Ambiguity in contrast to Structural Ambiguity, which is designated as such because a sequence of words can allow more than one interpretation of the grammatical relationships between the elements of a phrase or a sentence.

This paper surveys various types of ambiguous expressions, which are classified according to the conventional word class. It is not our intention to include all imaginable aspects of lexical ambiguity, nor is the reader intended to find any general grammatical rules or theories to clarify such ambiguous expressions.

KEY WORDS

Ambiguity, Vagueness, Parts of Speech, Context, Meaning, Structure, Play on Words.